

(5) その後の水城 —後世の「水城」に対する認識—

1) はじめに

水城は天智天皇3年(664)に築造され、平安時代末頃には大宰府政庁等の古代大宰府の官衙と同じく、維持管理されることはなくなり廃絶していったと考えられる。しかし、この平地に横たわる長大な防塁遺構は、非常に目につくこともあり、古代防塁施設としての水城が廃絶した後も、後世の人々の記憶から「水城」が無くなることはなかった。

本節では、水城が古代防塁施設としての役割を終えた後の時代、すなわち中世～近代の水城に対する人々の認識について考えるものとした。既に本書第Ⅲ章で、近世以降の研究史、すなわち研究者による水城に対する学識、認識について詳述しているため、それらについては基本的には略述程度にとどめ、本節では、必ずしも史実を反映しているとは言い難いが、研究史から漏れ出たような一般の人々の認識、日々水城と付き合いしてきた人々の認識・記憶がいかなるものであったのかを近代以降を中心に考えてみたい。よって、歴然とした資史料によって考察を行うものというよりは、ややもすれば推測を交えることもあり、必ずしも事実を示しているとは限らないことをまずは御了承頂きたい。

中世～近代
の水城の認
識

まず、中世では紀行文に現れる水城について紹介し、その認識について考察する。そして近代、特に日清・日露戦争と国難を迎える明治時代の水城の認識について、元寇記念碑建設運動をとおして考える。そして昭和初期に、実際に軍事施設を構築し維持していた陸軍の水城跡への認識を概略的に提示する。

2) 中世～近世における水城の認識

水城が廃絶した後、実際に著述者本人が、水城の現地に赴いてその姿を記述したと考えられるものに、宗祇の『筑紫道の記』がある。本書第Ⅲ章に詳述しているため、略述すると、連歌師として知られる宗祇は、山口の戦国大名大内氏の招きを受け、文明12年(1480)9～10月にかけて太宰府・博多を訪れている。刈萱関を通過し、太宰府を後にして博多へ赴く途中、水城跡の情景を次のように描写している。

『筑紫道の
記』

「越え過ぐるままに大成堤有、いはばよこたはれる山のことし、尋れは是も天智天皇のつかせ給ひけるとなん、民の愁いかはかりにかと思ふも悲し…」

都府楼跡同様に、天智天皇の命によって築造されたものという地元の伝承を伝えており、戦国時代当時、水城が天智天皇により築造された古代の防塁の遺跡と認識されていたことを示している。これは現在考えられている史実とほぼ同じであると言える。

また、近世に至ると、福岡藩では、地誌編纂の事業が開始され、貝原益軒による『筑前國統風土記』等の地誌類が編纂されるようになる。そこにも、水城の記載は登場し、それが天智天皇3年に築造されたもの、天平神護元年(765)に水城修理専知官が任命されたことなどが記載され、長さや高さ等の寸法、門の存在まで記載されている。

福岡藩の地
誌編纂事業

このことから、鎌倉時代に作成された『八幡愚童記』(第Ⅷ章(4)に詳述)には水城を元寇の文永の役の際のものと認識している一方で、近世の地誌類編纂は、古代の防塁遺跡である

と認識しており、基礎研究と実地調査によるデータの正確さが看取できる。

3) 近代以降における水城の認識 —元寇記念碑建設運動をとおして—

明治時代になると水城跡の認識に変化が見られてくるようになる。とはいえども、研究者の視点からの認識としては、古代の遺跡としての水城の認識は基本的には変わらない。

しかし、研究者以外の認識は、水城が必ずしも古代のものではなく、その認識の代表的な表れが元寇記念碑建設運動（以下、「建設運動」）に関連するものであろう。

元寇記念碑
建設運動

湯地丈雄

建設運動は明治21年(1888)、当時福岡警察署長であった湯地丈雄が提唱したことに端を発する。湯地は、長崎で起こった清国の北洋艦隊事件の際に日本の無力さを痛感、国防精神の発揚のため、帰国後、県知事に国防大治安論を提唱し、展開したのが建設運動である。数年後に日清・日露戦争に突入していく日本にとって、この国防精神を涵養する運動は反響を呼び、やがて全国的に展開されていくことになる。その運動の代表的なものが、現在の東公園（福岡市博多区吉塚）にある亀山上皇銅像の建設である。同時に、運動の一環として国防史の編纂も行われた。それが明治24年に刊行された『伏敵編』である。

「靖方遡源」

この『伏敵編』には附編として元寇以前の史料を集成した「靖方遡源」がある。その「靖方遡源」の中に「水城址」として、明治期における水城を描いた挿絵（本書第Ⅲ章Fig. 6・7）があるが、その中にの東門跡の傍らに「水城址標榜 其文ニ（憂国ノ士ハ少時車ヲ停メヨ）トアリ元寇記念碑事務所建」という木柱が描かれている。このことから元寇記念碑建設事務所が、水城を元寇の有事の際に使用された遺跡であると認識していたことが分かる。これは『伏敵編』自体が建設運動との関係で編纂されたという事からも推察できよう。

日菅上人

この水城跡東門に木柱を立て、蒙古襲来遺蹟の顕彰と国民の敵愾心の発揚を促そうとした関係者の一人として、日菅上人（佐野前勵）が挙げられる。日菅上人は、都府楼跡正殿の西側に草庵「日菅寺」を建立、周辺村民と共に道を造り橋を架け、天智天皇の祠堂を設けるなど、都府楼跡をはじめとする大宰府顕彰を語る上で欠かせない人物であるが（鏡山1979, 143-144頁）、上記の水城に対する日菅上人の活動は、先の建設運動に共鳴したものである。その日菅上人の運動の中で最も代表的なものが、元寇の際に立正安国論を唱えた日蓮上人の銅像（Fig.278）建設である。銅像は日菅上人の主導により、明治25年に起工、日露戦争の最中の明治37年に除幕されたもので、東京美術学校（岡倉天心校長）が製作を担当、竹内久一が木型を製作し、岡崎雪声が鋳造を担当したものである。

日蓮上人
銅像の建設

矢田一嘯

その銅像の台座周囲には、近代画家の矢田一嘯の原画による銅板レリーフ壁画があり、日蓮を通した元寇の様子が描かれているが、その中にも水城は登場する。壁画の一つに「文永十一年十月廿日元軍水城二迫ル少式景資敵將劉復亨ヲ射ル吾軍従是振フ」とあり、その情景が壁画に描かれている（Fig.279）。実際、矢田はこの原画を描くにあたって、水城も含めた元寇遺跡を訪れており、また、日蓮銅像の除幕式に際しては、元寇遺跡に由来する遺物も展示され、その中には水城水門の古木（木樋のことか）もあったという（佐野2004, 153・159頁）。このこ

「水城」の「元
寇遺跡」とし
ての認識

とより、日菅上人を始めとする元寇記念碑建設運動に関わった人々の中では、「水城」は「元寇遺跡」として強く意識されていたことが分かるであろう。

一方、ここに当時の研究者側からの視点として興味深い記述がある。水城等の大宰府研究・

顕彰において重要な役割を果たした郷土史家の武谷水城による『元寇史實の梗概』は元寇の概略について一般向けに著述したものだが、次の文章が載せられている（武谷1931、12-13頁）。

武谷水城
『元寇史實の
梗概』

次に一言すべきは、元寇と水城の錯誤なり。八幡愚童記は、我が軍水城に敗退し、水城に拠りて、最後元寇を防ぎたるものと為せり、之れ水城と元寇防塁とを混同し、又た文永、弘安の両役を混同せるに坐す。（文永役は只一日を終へず、水城迄退却を要せず、又た其の時間も無し、弘安の役は、元軍、筑前本土には一步も上陸し得ず。）尚ほ之より甚しきは、歴代鎮西要略に、水城一時元軍の爲めに占領せられ、元軍之れを修築して茲に拠りしを、我が軍之を攻撃して奪回したり、と記すが如きは、タワキも無き浪筆なり。（本年東京・名古屋・其の他の地方に於いて、弘安六百五十年記念として、幾多元寇懷古の刊行物出し中に、矢張り水城に拠りて、元寇を防ぎ得たるものの如く記述しあるは、何れも此の両書の誤りを受け、若くは其の誤りを伝へたる誤記を、更らに伝ふるに因る（以下略）

以上のように記述し、武谷はその誤伝の流布を嘆いている。つまり、武谷がわざわざこのようにして記述せざるを得なかった背景には、やはり上記の建設運動に見たような「水城＝元寇遺跡」という強い認識が、「水城＝古代の防塁遺跡」という史実以上に、一般に受け入れられていたという表れでは無かろうか。

これは、筆者の推論に過ぎないが、このように近代には、研究者とは異なる一般の認識として、「水城＝元寇遺跡」＞「水城＝古代防塁遺跡」となった背景には、近代の皇国史観による所が大きいと思う。それは水城の成立が、「白村江の戦い」という神国日本にとってはあつてはならない敗戦に由来するものであるというよりは、神威により勝利した「元寇」に由来するものであったとする方が、理解しや



Fig.278 日蓮上人銅像（博多区東公園）



Fig.279 日蓮上人銅像台座壁画銅板（右は説明文章）

すかったからではなかろうか⁽¹⁾。

このように近代以降、水城に対する認識は、研究者と一般の人々との間に乖離が生じていた可能性が考えられる⁽²⁾。

(岡寺 良)

4) 昭和期における大日本帝國陸軍の水城跡の認識⁽³⁾

a. 城跡としての水城跡—石割平造工兵少佐の水城跡視察—

太宰府市市史資料室（以下、「資料室」とする）に通の手紙が資料として保管されている⁽⁴⁾。それは、B5判1枚の両面書き福岡懸野紙に7月8日付けで福岡懸廳社寺兵事課史蹟名勝天然記念物係の川上市太郎から水城村々長宛に書かれた手紙である。内容は「陸軍省築城本部の石割平造」という人物が7月17・18日にかけて大野城跡・岩屋城跡及び水城跡を調査するので協力を要請したものである。

石割平造 石割平造という人物は当時の陸軍の工兵少佐という身分で、陸軍省築城部内⁽⁵⁾に昭和8年(1933)に発足した「本邦築城史編纂委員会」の囑託であり、当委員会で直接仕事を行った人物である。本邦築城史編纂委員会は城郭技術を研究することにより国威発揚と軍事上の参考にすることを目的に発足し、10年計画で『大日本築城史』という1冊千頁、計7冊を刊行することを最終目標としている⁽⁶⁾。その具体的な仕事内容は石割と同様の職務遂行者であった中山光久工兵少佐が、当時を以下のように振り返っている⁽⁷⁾。

本邦築城史
編纂委員会

中山光久

「(前略)調査事項は細い規定があるのだが、先方に予報し、現地到着偵察後、関係者に逢い、資料も得て人夫を雇い、測量特に城の強度を示す断面測量を多し、術工物の調査等で大概一城一週間位、帰京して本に纏めるまで一ヶ月かかり、毎城図面が多かった(後略)」

このように手紙の内容を紐解いていくと、資料室が所蔵している手紙は、石割が調査対象城跡のある地の行政組織である福岡懸廳社寺兵事課史蹟名勝天然記念物係に予報した後に、懸から水城村という一市町村へ通達した文書であることがわかる。

また、この手紙の視察予定内容を裏付ける資料として、国立国会図書館に所蔵されている『日本城郭史資料 肥前国 三十七』に所収されている「自六月十五日 至七月二十三日 福岡、長崎、佐賀、熊本懸下城跡視察豫定表」に視察者である石割の名と同様の日程と視察する城跡名が記載されている⁽⁸⁾。さらに、資料室所蔵の手紙の最後に石割が調査の際に宿泊する予定であった太宰府町(当時)にある「泉屋」の名前が具体的に記載されている⁽⁹⁾。これらのことから、実地視察は計画から実行に移された可能性は高いと考える。

本邦築城史編纂委員会による資料収集・実測図(ケバ表記による平面図と断面図)作成の精度については先学により把握され、資料批判がなされた上で高く評価されているところである⁽¹⁰⁾。水城跡に関する資料収集や実測図作成は、『日本城郭史資料』に水城跡に関する資料が一点も掲載されていないことや、二日間という先述の具体的な業務内容に比べるとあまりにも短い視察日程からして、この視察時においては行われなかったようである。しかし、石割が訪れた昭和10年7月現在における日本本土にある水城跡は、戦場でない場所にある「城跡」という認識であり、調査・研究の対象となっていたようである。

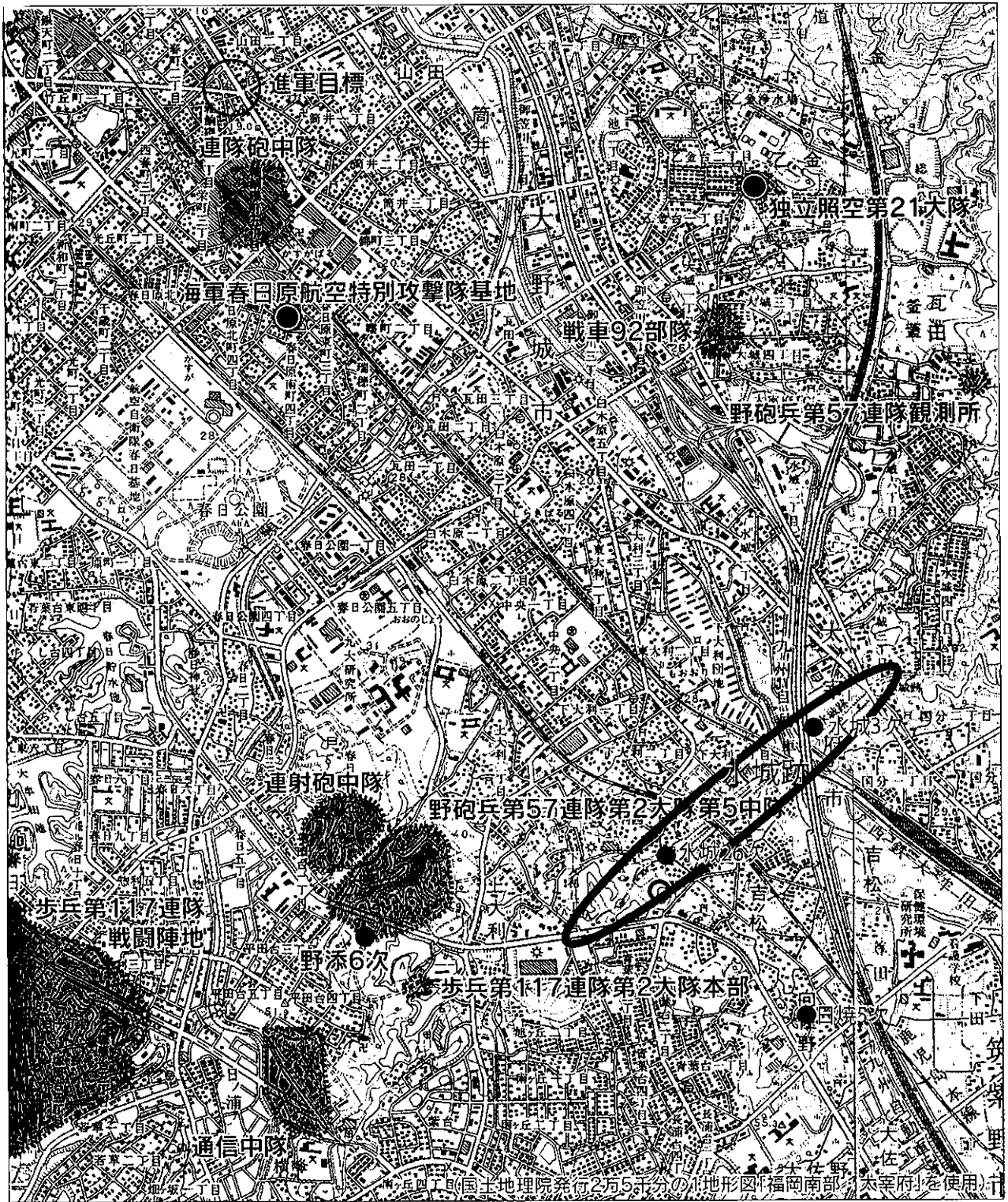


Fig.280 現在把握されている水城跡周辺の本土決戦準備の様相
(1/30,000 ●は戦争関連の遺構・遺物が報告されている遺跡 大野城市教育委員会 2007 に加筆作成)

b.戦場としての水城跡—本土決戦準備の中での水城跡—

昭和20年(1945)初頭、太平洋戦争(大東亜戦争)の戦局の悪化から、『帝國陸海軍作戦計画大綱』(大本營陸・海軍部,昭和20年1月20日)という初の陸海軍共通の作戦計画が策定された。これにより事実上の本土決戦準備が進められることとなる。

そして、「20年1月22日軍令陸甲第13号」により九州一帯の防衛を目的とした第16方面軍が発足する。同年2月11日には編成が完了して、当初司令部は福岡に設置された(防衛庁1972)。以後終戦まで第16方面軍によって、博多湾方面から侵攻してくる連合軍を想定して、水城跡周辺には多くの部隊が配置され、これらの部隊によってさまざまな施設が構築された⁽¹¹⁾。しかし、水城跡には直接的に本土決戦に伴った施設跡は現在のところ公には確認されていない⁽¹²⁾。周辺においては本土決戦準備の一端である可能性が指摘されている洞窟壕が大野城市大字上大利において埋蔵文化財として発掘調査されている(大野城市教育委員会2006・2007)。これは形状から弾薬・食糧格納庫の可能性が指摘されているものである。近年、水城跡周辺の埋蔵文化財発掘調査に伴う報告書中には防空壕跡や弾丸・認識票など戦争関連の遺構・遺物が報告されるようになってきている⁽¹³⁾。また、水城跡からは少し離れた場所ではあるが、先述の第16方面軍司令部は同年6月25日に施設完成に伴って筑紫野市大字山家に移転する(防衛庁1972)。これは、宮地岳の南側山麓に構築された洞窟陣地であり、現存している(筑紫野市2001)。また、当然のことながら、第16方面軍は、戦火を交えることなく終戦を迎えている。

このように、水城跡周辺に第16方面軍の前線部隊が展開していることから、一見、水城跡が本土防衛のための防衛施設の一環として、日本帝國陸軍に利用された可能性も考えられるかもしれない。しかし、現在把握されている水城跡周辺の部隊のほとんどが、水城跡の前面(博多湾側)に配置されている(Fig.280)ことから、昭和20年段階における水城の防塁(軍事施設)としての役割・認識は薄いと評価せざるを得ないのが現状である。

しかし、資史料を中心とした調査成果のみではこれ以上の具体的な内容には迫れないと考える。ここで、この時代のことを調査する手法の一つとして当時の水城跡を見てきた人々たちへの聞き取り調査が有効であると考え。聞き取り調査を行い、これらの成果を資史料と再度照らし合わせるにより聞き取り調査成果も歴史資料として見出せるようになると考える。今後、このような調査が大規模かつ組織的に行われることを期待する。(下高大輔)

5) おわりに

水城は、天智天皇3年(664)に築造された古代防塁遺跡であることは言うまでもない。しかし、見てきたように「水城は鎌倉時代の元寇の時のものである」という俗説がある。実際、筆者も水城跡の周辺住民から、同じような言説を聞いたこともあり、学術的には全く根拠のないことではあるが、現在でもそのような認識もあるのだということを痛感した。

このような俗説が産み出されてきた背景には、「水城」が古代官衙施設として機能しなくなり、維持管理がなされなくなった後に、様々な認識の変遷があったのであろう。

今回、古代官衙・水城が廃絶した後、すなわち中世～近代の水城に対する認識の変遷を見通した。このような検討は、古代の水城を考える上では全く必要ないと思われるかも知れない。しかし筆者はそのような問いかけに対しよう答えたい。遺跡の認識は、遺跡が形成されてくる

過程において発生してくるものであり、現在の我々も後世の認識の積み重ねの上に立って過去を認識していることに変わりはない。だから必要なのだと。(岡寺)

【註】

- (1) また、白村江の敗戦を背景として成立した「大野城」にも同様のことが推察される。それは大野城と、同じ四王寺山塊に位置する戦国期城郭の岩屋城との混同である。筆者は近世～近代の岩屋城の絵図の検討を行ったことがあり、検討の結果、岩屋城を正確に描いた絵図と、大野城全体を岩屋城として描く絵図の2系統の絵図が存在したことを明らかにした(岡寺2007)。後者の絵図の成立背景には、「古代大野城の遺構＝岩屋城」という意識があり、それは水城同様に、城門や石垣等の大野城の壮大な遺構が「白村江の敗戦」に由来するよりも、「北部九州の戦国時代を締めくくる華々しい決戦場(岩屋城)」に由来するべきものだと考えられた結果であると思われる。
- (2) 研究者は、水城を古代の防塁遺跡として正しく認識していたというのは紛いもないことであるが、元寇遺跡としての意識は皆無ではなかったとも考えられる。武谷水城は、元寇と水城との関係性を否定しているものの、同書の冒頭に掲げる「元寇時代宮崎博多百道今津附近の略図」(Fig.281)には、しっかりと水城を入れている。また、かつて水城跡第5次調査で水城の外濠の調査が行われた際にも、調査者の亀井明徳は鎌倉時代の古銭が出土したことから、元寇との関連についても言及している(藤井・亀井1977 134頁)。現在でも、水城の調査で鎌倉時代の遺物・遺構が出土すると、元寇半分ながらも元寇との関連性が話題となる。これは最終項にも書いているが、やはり研究者とはいえ、後世の人々の認識の積み重ねの上に立って、過去を認識していることに他ならないのではなかろうか。
- (3) 本項においては当時の時代背景を伝えたいために、あえて旧字体を使用している部分がある。
- (4) 当資料は、太宰府市文化ふれあい館で平成19年6月23日～7月29日に開催された「あなたの近くの文化財 太宰府市民遺産展」の「四王寺山」に関するコーナーで公開された資料である。
- (5) 陸軍省築城部については、倉田典昭2003「陸軍築城部」「日本の要塞—忘れられた帝国の城塞—」学習研究社 に詳しいので参照されたい。
- (6) 本邦築城史編纂委員会については、中井均1993「本邦築城史編纂委員会と『日本城郭史資料』」について一敗戦前の城郭研究史を理解するために『中世城郭研究』第7号「中世城郭研究会、八巻孝夫1996「明治から敗戦までの城郭研究の流れについて—旧陸軍の城郭研究及び縄張り研究を中心に—」『中世城郭研究』第10号「中世城郭研究会」に詳しいので参照されたい。
- (7) 中山光久は後に、「城郭研究の着眼点」「城脊」第9号(日本城郭近畿学生研究会、1968年)、「私の城郭研究と思い出」「城脊」第23号(日本城郭近畿学生研究会、1974年)、などで当時を回顧している。
- (8) 『日本城郭史資料』については前掲註6の中井論文に詳しい。これは『大日本築城史』編纂のための石割平造少佐の手控えと明治時代の築城史の分擔者であった難波泰一大佐の原稿控えを合冊したものである。B5判の主に陸軍軍紙に書かれた原稿と実測図、古絵図写本などを和本綴じとして、十二の帙に納められている。このうち、本稿に関わりのある水城跡について収納されていると予想された第11帙の第36冊「九州一般」や九州の旧国単位のをマイクロフィルムで閲覧したが、水城跡に関する資料は確認でき

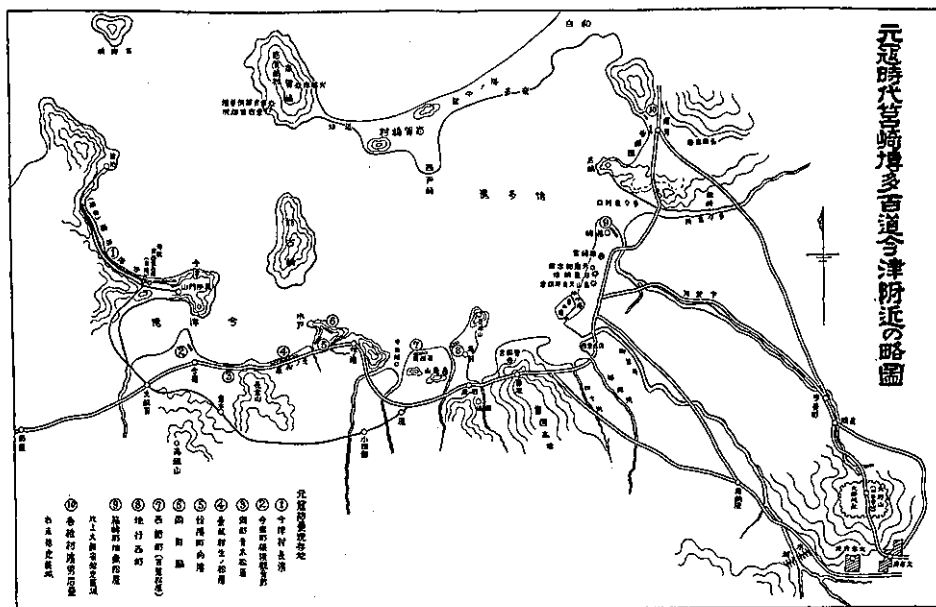


Fig.281 元寇時代宮崎博多百道今津附近の略図 (武谷 1931)

第Ⅷ章 水城とその周辺

なかった。なお、筑前国でまとめられたものは存在しない。

- (9) 「泉屋」については、『太宰府市史 通史編Ⅲ』（太宰府市，2004年）の巻頭カラー挿図「5 太宰府神社参道の商店（昭和前期）」に位置が記載されている。
- (10) 前掲註6中井論文
- (11) 水城跡周辺の部隊・施設配置については、防衛庁1972文献と共に春日市1994『春日市史 中巻』、大野城市2004『大野城市史 下巻 近代・現代編』に詳しい。
- (12) しかし、西門跡南西側の丘陵上に位置する水城院跡付近（Fig.280中の○印の箇所）を踏査すると、多数の段造成や丘陵頂部に高射砲陣地を彷彿させる複数の凹みが確認できる。
- (13) 太宰府市教育委員会2008「日焼遺跡第5次調査」『太宰府・佐野地区遺跡群24』（太宰府市の文化財第100集）や、本書Fig.175- 7・8を参照されたい。

【参考文献】

- 大野城市教育委員会2006「第6次調査」『牛頸野添遺跡群Ⅲ－第6・8次調査－』（大野城市文化財調査報告書 第69集）
- 大野城市教育委員会2007「太平洋戦争と上大利」『大野城市の文化財 第39集 大野城市の遺跡⑩ 南大利編』
- 岡寺 良2007「太宰府・岩屋城の研究（下）」『九州歴史資料館研究論集』32 九州歴史資料館
- 鏡山 猛1974『太宰府遺跡』ニューサイエンス社
- 佐野前暁2004「日蓮聖人大銅像百年の歩み」日蓮聖人銅像護持教会
- 武谷水城1931「元寇史實の梗概 弘安役六百五十年記念」福岡大道學館
- 筑紫野市2001「第七章 近代化遺産と建造物」『筑紫野市史 資料編（上）考古資料』
- 藤井 功・亀井明德1977『西都太宰府』NHKブックス
- 防衛庁防衛研修所戦史室1972『戦史叢書 本土決戦準備<2>－九州の防衛－』朝雲新聞社